



昼休み。

「千堂~~~~お♡ お待たせえ」

四時間目終了のチャイムが鳴り終わる前に早々と一真のクラスに顔を覗かせる神奈木は……
相変わらずだった。

（誰も待ってねーって）

何の因果か。

どういう、弾みか。

それとも、避けられない災厄の前触れなのか。

何をどう考えても、

（よりにもよって、なんで——俺？）

疑問符しか思い浮かばないほど神奈木に懷かれて、一真的には、
傍迷惑^{はた}をスッ飛ばして大迷惑もいいところであった。

なんで、こいつはフツーにできないんだ？——とか。

どうして、わざわざ小事を大事にしたがるんだ？——とか。
いったい、こいつの頭の中はどうなってるんだ？——とか。

事ここに至っては、それも今更……なのかもしれないが。よけいなところで無駄に神経を遣わざるを得ない一真にしてみれば、つい、どっぶり深々とため息が出てしまうのだった。

わざわざ一真の席にまでやってきて、毎回、

「昼メシ、食いに行こお」

それを口にする様は、まるで、幼稚園児のお弁当タイムのノリである。高校生になってまでこういう展開は、さすがに、まったくの予想外であった。

ランチタイムは、学校生活の潤い。オフスタイル

（メシくらい、ゆっくり落ち着いて食いたいよなあ）

一真はそう思っているだけなのだが。

当然のことながら、学食はいつも込んでいる。なんでこんなに人が多いんだ——と嘆きたくなるほど、込んでいる。その半分くらいは、どこにいても半端なく目立ちまくりな神奈木のせいに違いない。

ナマ神奈木をじっくり観賞できる眼福？

神奈木が学生食堂を利用するようになってから、売り上げが急速にグンと伸びた。などと、

言われている。

まさに、神奈木さまさま？

学食関係者の本音だろう。

なにしろ、歩く広告塔である。しかも、無料……。たまに、神奈木のライスが普通よりも大盛りのような気がするのには目の錯覚か。

いや……。それだって、学食のおばちゃんにまでニッコリ笑顔を振りまく神奈木の無節操なタラシモードの威力かもしれないが。

その一方で。

一真にとって学食までの道のりは、ある意味、荆道いばらも同然だった。
どこを歩いていても、視線がブスブス突き刺さる。

——ほら、あれが。

——どいつ？

——あいつ？

——へえー、あれなんだ？

キリキリと痛い……というより、好奇心丸出しのそれが……ウザイ。
払っても。

切り捨てても。

叩き落としても。

まとわりついてくる視線は後から後から湧いて出てくるだけで、いっこうに途切れない。

無視しようにも、顔を上げれば常に誰かの視線にブチ当たるといふのは、それはそれでけっこうキツイ。いっそのこと、

(薙ぎ倒してやろうか)

それを思わないでもなかったが、そうすると更によい色がついて悪目立ちをするのはわかりきっているし。

(変な刷り込み入っちゃった)

だから、元凶はあの屋上だろう。

あれから、一度も行っていないが。それ以外に思いつかない。もしかして何か変なジンクスでもあるのではなからうかと、一真は頭を捻^{ひね}らずにはいられない。

物言いはえらく柔らかいが、その分、押しの一手でグイグイ迫ってくる神奈木がマジで鬱陶しくて。そんなことを口に出そうものなら、女子に総スカンをくらうのは目に見えているが。

拒否れるものならば、全部まとめて返品不可のハンコを捺して投げつけたところである。

——誰に？

気紛れという名の出会いの神様に……だろうか。

そんなわけで。一真は昼休みになると、さっさと教室を出て行くのが日課になっていたのだ

が。そのうち。それも、無駄な足掻き……とばかりに神奈木に先を越されるようになってしま
うと、あとはもう、何をどう文句を付けようが、

『ブー・プロブレム』

——ばりのニッコリ笑顔で人の話を聞かない神奈木の得意技に押し切られ、

(好きにすればあ?)

——状態に雪崩れ込んでしまった。

そんな自分が、一真的にはイマイチ納得しがたい。

どうしちゃったんだ、俺?——みたいな。

『嫌なことは、イヤ』

『できないことは、できない』

『やりたくないことは、やらない』

そこらへんのケジメの付け方はきっちりしている方だと、一真なりに自負していたからであ
る。

優柔不断は、百害あって一利なし。

ズルズル流される……という言葉は、一真の辞書にはなかったはずなのだが。高校生に
なったとたん、ずいぶんとヌルくなってしまうた。

なんでだろう?

自分でも訳がわからなくて、つい、首を傾げたくなってしまう。

その一方で。

(神奈木って、いったい、どういう神経してんだかなあ)

一真がそれを思うのと同様に、一真と神奈木という異色のツー・シヨットは代わり映えのない日常のカンフル剤——なのか、スキヤンダラスな噂の恰好の餌食になった。

なんで？

どうして？

どういう接点？

興味津々でそんなことを問われても答えようがない。それを一番知りたいのは、一真なのだから。皆、聞く相手を間違っている。

(神奈木に聞けよ、神奈木に)

そう思うのは、一真だけなのか？

いつそ黙殺していると、噂は更にガソリンぶっかけ状態になった。

あの神奈木をどうやって誑し込んだのか？

エサは……何？

見返りは——どれ？

(みんな、暇だよなあ)